



先進繡像玉石雜誌

四篇

礼



河合貞康書

又月下旬より兩科乃峯々小狼烟を舉村々小驪を吹三  
る敵電光を閃かし雷鼓を擡り々々縣一且々幸隆か  
を々々問謀と也追々々々里景虎い々々六月朔日春  
日山を發途ありけふ世を告夫里一かは小室内山へ往  
進し持重の備を評定と也く如里幸隆を景虎を々々々  
悪しと思ふ小者ありき也とたぐ村上義清を援く葛尾  
へ歸し兩科以下乃舊領を安堵せし免んと策を以て  
乃故かやう了矢と家乃習如る景虎を緩く義清を  
か足を討取趣き小あらび夫と能は崑崙小燃系火の玉  
石と小焚が如し又景虎を々に打捕たらん小は義清  
更小身をよび家處如く路傍小袖をひろげ軍門小耻を

河合貞康印

さらさんて必定せりと見積りははかくおとく思を勞せ  
ふ船見景虎をよと信約にお強しと武田家と雌雄を争  
ふとたぐ村よりそのまじり義勢の意地おがら去年  
思乃外お甲の勢お衝立らさし憤もなからん且の真  
回ら種々お計策との心おくは今年ハ要害お本陣を  
急急おおやと軍を大事おかし甲の勢を疲かしと十全  
乃功を立んか為お地無峠を切處とあし戸石乃古城へ  
六月十日お馳着たおけ城の村上乃家乃子津久左衛門  
か居處おしを往歳天文十四年三月十日晴辰朝辰  
たぐ一時責お政おとさせしは日晴信朝辰景虎乃戸石  
お着たおしを岡おひまじ味方乃旗將へ下知おしお

りおは景虎春日山を發しを多くと小縣郡まぐ打和お  
し思慮淺く軍法お練熟せし自己乃梟雄を恃りてお  
る危人を武者風と云へるお東西をめぐ敵地おお戸石  
乃古城に保る後日おかをわ過んと思ひお人お面々  
よく案しと見えへ人数お六乃内外と別お兵糧秣の  
何駄も荷擔たお居らん少くと廿一日六十斛餘を用お  
登し小荷駄の數を以てお多お數陣十日お日お過べり  
らにあおかしお漫お矢一乃中射るお鉄砲一を射しと  
るお能まお備を守りて誤しおと定めらるお危か  
岩尾乃城おお後ら逃けお是れ幸隆お援掛をさし油と  
きためとせおるお大見景虎戸石を著とせ乃まぐ是輕

を出一く岩下布下ありを放火し鉄砲を打掛ると云  
と味方軍令を守りしより出合ねを越後勢乃先手  
案不相違しせんかへ形は戸石をさし引退き夜  
明はあつた矢津津乃生御を狼藉し小諾乃城お籠り  
たが小山田備中守を挑と小山田等らあつて居  
る後ハ力形引かへ以幸隆を以と思おしとあり越後  
乃推童たち乃肝を以ふさ以辱し厭乞くと云い夜お  
あをささく岩尾の城を出景虎が先手是輕乃打あを荒  
牽川を隔る窺ひ居けあかくと中知以越後乃兵士爰彼  
お馳散民家を亂妨し糧料を侵奪し婦女を捕掠志く餘  
念おあけ形あ處へ思わよらぬ拮据よし火燃上り指を

と粗風吹の乃里撲滅をうらあらざる又中や傍乃草  
葺よし一條乃猛火閃き日く里忽ち方お焼ひるあは  
右彼左健了周章し是を焚かたが形し大不業不やあら  
ん味方お放火せし若し覺えぬお威を矢火と云へき  
かあ形不思議と驚き駭きとたり形お神箭砲と云者  
邊を去勢異邦より傳るる北國おとあはを色由く由  
名たよあつてお罪お色は真田がうちしと云越後勢の  
中お知人更におありと云  
孫子お火攻又ありしお火入敵と陳師し敵乃傍近  
乃草風お因るあ色を燒戰乃助なり二お火積焚の積  
蓄を燒之お火輜を乃輜重をやくは火庫間人を

て敵營に入る其兵庫を焼くむ等。又火墜火を以て  
營中へ墮入り。矢頭乃法鐵を以て火を籠る。箭頭  
の著強弩を以て敵乃營中へ射火を射入り。必因あり  
煙火を素具し。火を發せし時あり。火を起し日あり時  
とは。又乃燥なり。日とは月箕壁翼軫小ありなり。九  
乃日宿の風起乃日なり。六月四日。日張宿。又日翼宿  
六日。日軫宿と宿曜經不見也。孫子小宿曜を配し。矢  
の前へ傳えしなり。然也。及真田乃火攻なり。又日六日乃日  
なり。金と出と掲馬なり。形。淵鑑類函二百十二。火具  
を載火獸と云。又火を以て火を燼。獸中へをを。獸小は  
孔を開き乃獸を野緒なり。及聲鹿なり。の項上へ繫ふ

か。其尾乃端。針管。向。あ。色。を。綴。ハ。奔。走。一。一。  
草。入。と。と。飄。知。あ。と。火。發。る。火。禽。と。云。及。胡。桃。を。割  
る。中。を。空。お。し。艾。と。火。を。實。し。而。孔。を。開。く。と。合。せ。野  
雞。の。項。下。へ。繫。ふ。乃。尾。へ。針。一。と。あ。色。を。綴。ハ。奔。走。草。小  
入。器。を。あ。と。と。火。發。る。と。云。及。乃。他。へ。火。兵。火。盜。火。警。な  
と。云。具。も。見。也。又。隋。書。火。書。と。云。及。有。杏。子。の。中。を。磨  
空。お。し。艾。を。ゆ。く。あ。色。を。實。し。雀。乃。尾。上。へ。繫。火。を。加。へ  
薄。幕。を。群。放。せ。色。は。飛。く。城。壘。乃。中。へ。入。せ。乃。積。聚。廬。舍  
乃。上。り。棲。窟。を。志。す。と。云。と。火。發。る。あ。色。を。火。書。と  
云。と。及。又。魏。志。小。諸。葛。誕。及。一。か。は。大。將。軍。司。馬。文。王  
衆。を。督。ふ。く。あ。色。を。討。じ。面。合。圍。し。表。裏。再。重。を。誕。等

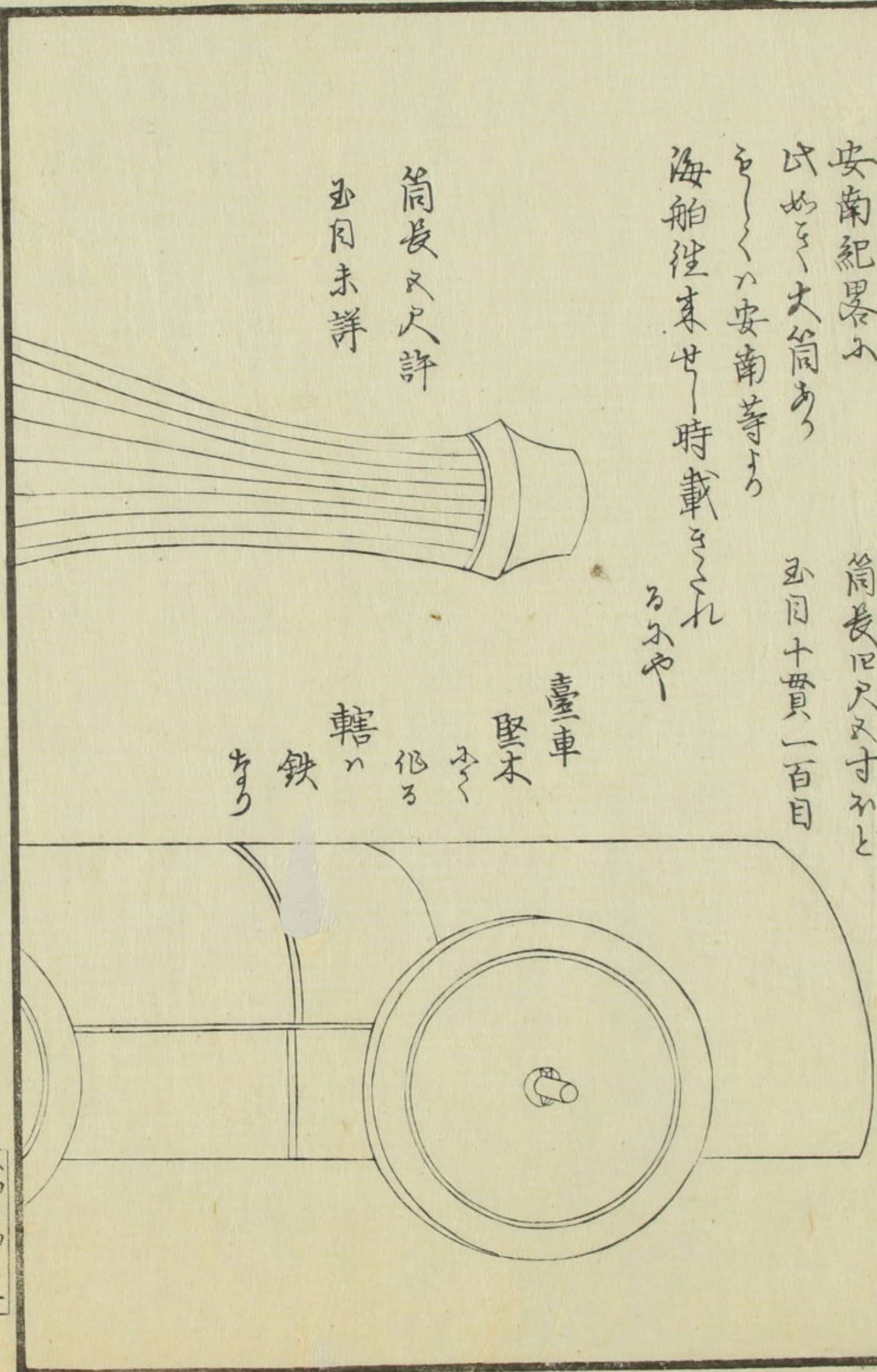
史の攻具を為し晝夜又六日南圍を攻圍を决し出ん  
と以圍上の諸軍たりを不車火箭を發しむ  
かいつく其攻具を焼破しと見ゆ也は火箭と云ふ乃  
三國より河見ありと知へし

景虎の乃躰を見し是は我隊の神箭砲を敷置し味方  
のをいやく試術を得しゆゆは是を真田めが河為  
と覺えたり如何にゆしと真田を德徳よせく生捕ふし  
たらん若しは莫大の新恩を施すありと慕ひし  
の越後勢乃ちあり智累ありと云ふなど乃若しゆ  
守寄く評儀しゆと云然るべしと云儀ゆありと云  
十日あまたふありけ也は景虎の射退席し一まの陣

を引拂ふ置し志りゆば甲列勢かあり以咬留んと後を  
あつとんと必定なり其乃と味方地勢味乃氣後ま  
あつらひよせくまをやり不盛返しと一戦を催さハ  
勝利をゆんと疑ふとして十六日乃夜の刻に陣拂し  
軍勢を引上たり也は甲列勢乃陣々より戸石を成  
子丑の南より三回里より又六里を隔ち也は合戦ハ已  
午乃刻ありべし志りゆ六月己午乃刻あり申酉乃方  
ふ位し未乃刻に至也は成乃方孤とな也里夜ふ打立  
午未子地勢味乃馳着く待戦し孤を背おしと慮を付  
す也一乃女子十人乃史史不敵をふと史記不見  
た方方位形也はなりべし晴信朝臣か孫くよ里景虎の

古砲圖 浪華一故家藏

安南紀畧云  
 比如く大筒あり  
 之くハ安南等より  
 海船往來せし時載せし  
 るや  
 筒長四尺寸ほど  
 五目十貫一百目



筒長四尺許  
 五目未詳

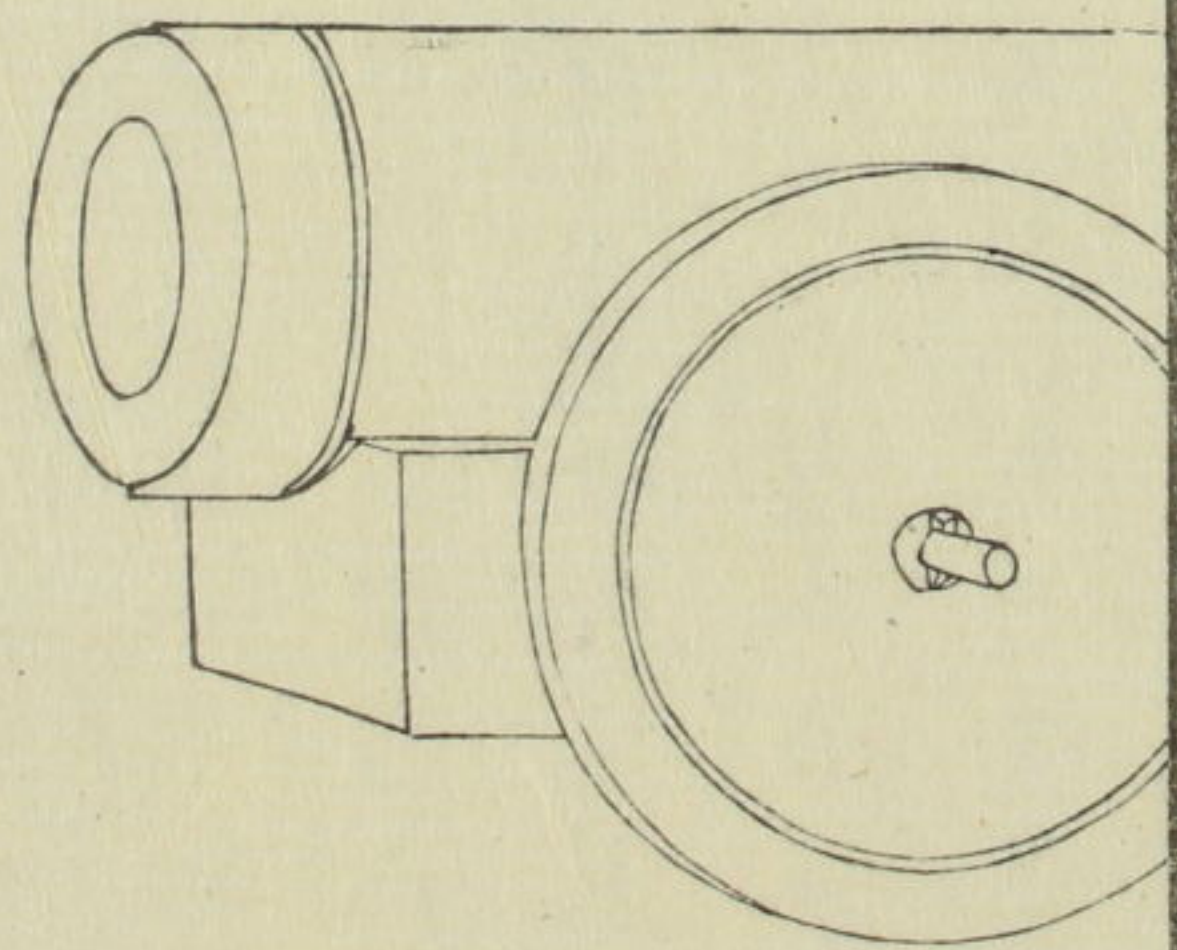
臺車  
 堅木  
 轆  
 鉄  
 五目

信玄手寫

五四ノ四五



唐銅  
 鑄立  
 種子島小  
 出れ小似たり  
 器あり



和泉國堺乃住人  
 橋屋又三郎乃鑄  
 立一処と云又ハ  
 真田左衛門幸村  
 の遺品と云

計敷かど乃とは胸中不察知せしう龜と云天時人知の  
道理を累代相傳乃秘術入りし。か里ふ他乃欺誣を更  
あふ龜をわらざる諸手不下知志く去を追せ以景虎  
地藏峠子馬を夫く。甲列勢を今やくと待しかと由更  
お一人由付したふ兵士を見以さくわすく真田が間諜  
子味方乃方便を同出せし故ならん謀由也く其軍  
利なきと古今由た免く多し然の急を越後へ引かへし  
かさ孫く謀累を回さへし形うとく速く小関乃山を越  
く本國へ引返しし。真田が思慮深き勇士か也は景虎  
村上を援けし。信列へ打お教とさくふ兩度不及ふと云  
と由甲列方乃諸將よく敵乃機密を窺ひ志くく去を

防く術を乃圖ふあく也は六七子乃大軍を率以許後の  
兵糧を費しかりし。是れと云へしと由為得せ教とを血  
氣乃景虎さあせくやしくおり入る也。持く今夜の對  
陣十日おお教まく一度由まとの弓箭を採しと形し  
然しく子負死人の二に而ふ餘也りと聞し。時日を後さ  
以打おんと必定形りたし。代夜を伊奈木曾小笠原乃  
諸將と謀し合せし。甲列勢を二に分んと謀ふあらん  
川中島子紗向ふて其消息を探ふへし形うとく。勝不衆  
尾を三出く。ま川善光寺へ系留し。商人乃旅り病川を學  
を形し。犀川乃渡守お身をよせく。一日二日まく人うち  
し。七月上旬お中を早事終了。怪しき僧あ我出某里た里



年教より十餘あり。紺綱乃法衣。不之物を擎持。たふの洞  
家乃偏冬僧。りと見ゆ。せとゆ。よく。察の法衣。了。新由付  
を。袈裟。平絹。乃黒色。あり。あせ。せと。乃僧。ふ。あ。り。せ。り  
り。せ。と。知。た。せ。は。猶。あ。り。ぬ。顔。色。み。く。御。僧。を。あ。せ。よ。り。何  
處へ。所。越。ひ。や。らん。願。く。る。所。供。了。召。具。せ。せ。玉。を。ら。は。  
廣。丈。を。量。乃。慈。悲。お。あ。べ。と。泣。く。か。き。け。け。せ。は。僧。の  
云。や。う。貧。道。の。あ。せ。よ。り。深。志。乃。檀。那。お。輕。ひ。く。知。識。を。請  
せ。せ。よ。り。本。曾。伊。奈。乃。檀。越。を。め。く。致。ゆ。乃。形。里。供。人。具。一  
く。詮。か。し。と。云。高。人。云。や。う。深。志。お。ゆ。本。曾。お。ゆ。伊。奈。お。ゆ  
年。頃。の。得。意。の。ゆ。へ。と。ゆ。か。く。せ。か。り。病。ひ。の。せ。く。一。日。乃  
狼。た。よ。お。く。一。里。乃。路。ゆ。ゆ。か。た。し。せ。め。く。深。志。お。く。同。伴

(玉四ノ四ノ七)

か。し。玉。を。ら。は。彼。處。あ。り。便。宜。の。信。者。を。引。付。ま。ゆ。り。以。て  
き。形。つ。と。談。ふ。や。と。う。僧。お。あ。と。り。思。ひ。た。ん。い。ご。せ。ら。は  
と。う。許。乃。高。人。火。お。よ。致。さ。ひ。甲。斐。く。去。く。出。立。傍。お。引  
連。く。猿。乃。馬。場。を。打。お。し。麻。績。乃。里。を。ゆ。る。處。を。く。青。新。西  
條。之。た。せ。橋。た。ち。作。乃。あ。形。く。か。る。會。田。乃。宿。お。一。夜。明。し  
翌。日。乃。深。志。へ。著。卷。を。お。檀。那。お。せ。り。乃。用。意。と。問。ハ。僧  
乃。語。る。や。う。深。志。乃。小。笠。原。殿。を。久。し。き。檀。越。形。り。ま。ひ。是  
へ。奉。向。し。せ。乃。周。旋。よ。り。本。曾。へ。申。ゆ。ん。伊。奈。へ。申。ゆ。べ  
き。今。豫。定。わ。く。と。云。高。人。お。く。云。と。形。く。僧。乃。後。お。付。く  
行。か。う。一。足。二。足。と。後。也。深。志。乃。町。口。あ。り。乃。田。町。針  
ゆ。引。下。り。け。り。僧。乃。高。人。を。待。く。け。り。け。り。を見。ぬ。よ。り。あ。り

商人をたゞさうりて走る元來了かへ三歸里路傍か  
小社乃裏へ這入衣服を改め保福寺乃路を志く原村  
乃耕地を過り以て回顧之は深志乃方より騎馬二三  
十歩士口又十許うちおをふが獻そふ一商人乃其方へ  
逃るを止よくと呼するをかろゆくありまは僧也  
商人を後者ならびと思ひしかば小笠原乃許ふ置るや  
の如追子をわけし形然共商人乃真田乃會因乃泊ふ  
く僧乃齋日一景虎乃状を披見し廿一日と云日附ふ二  
點を亦え廿三日と改め去るぬ面く元乃如く對ふ又  
外不見登る物もあけせば深志乃町より逃る引返  
志岩尾乃城ふ入使を甲府ふ立しかば晴信朝長七月十

八日ハ子餘人を引率して甲府を進發せら也十九日卯  
刻ハ潮尻砦ハ馳着く放火し玉へは伊奈本曾小笠原乃  
先備一万余人あて打も峠乃西ふ北へ去りけふが景虎  
乃出陣を廿二日と心得た也は今少油所せし如く火  
小周章一忽ハ敗軍以景虎去乃しを聞そくは先登の  
禪僧めが慮あそく路次ふく真田ハ一計せ也くと覺  
たり悪ゆふくと躍あふも怒りけふ處へ歸里志か  
は之家伊奈本曾乃返降を聞終里彼商人の事をきく  
乃ち禪僧を刀の棟あて二打之打り去る奥へ入けふと  
形里此一節本曾乃志岩尾乃真田ハ謀ら也一第ニ回  
家孝かくく代年ハ暮天文十八年ハ春也ハ夏來里

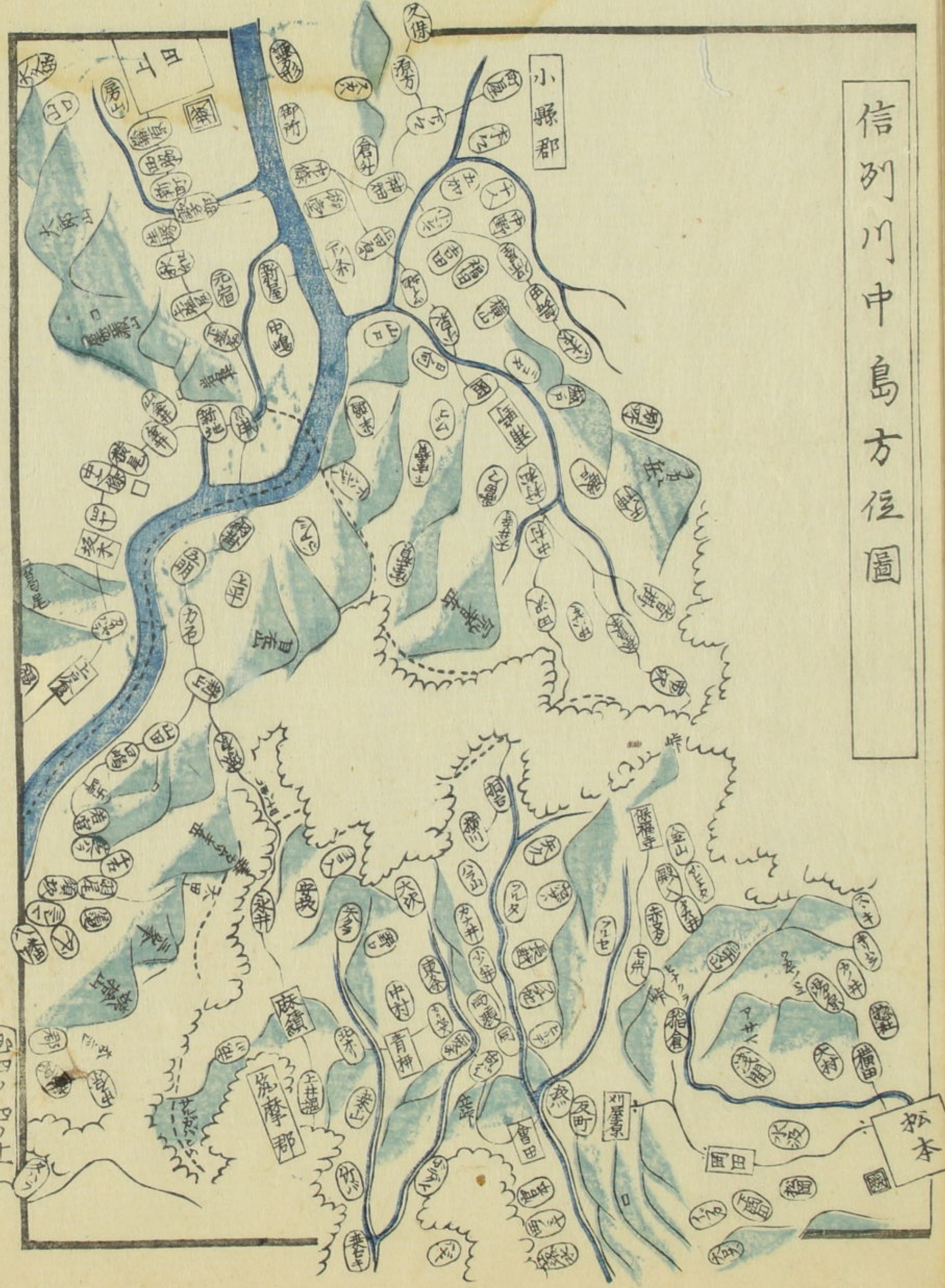
山々乃雪消往來乃路ひらけしかば、是もや景虎打者敦  
からん。楚乃期を知りやとく、真田を鹽賣商人、身を移  
越乃長濱なやくと、深入り、案内志し、敦春日山あり  
を巡り、日月下旬乃陣觸を切し、歸く、西科の佐士  
楚のあり、海を告出、小室肉山乃城々へ入り、景虎  
勢探乃次第を語り、甲府へ脚力をたたく、事乃始末を注  
進せしむ。晴信朝長、孫く、伊奈本曾、小笠原へ勢  
を向んため、上乃諏方より出陣あり、分引か、登り、佐  
久郡へ馳向、我、く、く、く、日月廿四日、午刻、景虎八  
千乃人数、小縣郡より出、出乃た、は、是非、二城を  
攻め、と、人、を、越、後、へ、生、く、か、登、ら、し、と、誓、し、出、か、と

と、雜説せし、か、と、甲、列、方、乃、諸、士、何、也、也、擒、虎、乃、効  
卒、挺、擊、乃、勇、將、あ、は、は、は、と、せ、以、城、門、を、閉、之、防、禦、の、術  
を、盛、ふ、か、を、見、殆、小、肉、山、乃、城、を、ハ、飯、富、兵、部、少、輔、虎、昌、一  
手、二、百、餘、騎、も、く、籠、里、乃、我、を、攻、落、さん、と、く、景、虎、八、子、乃  
勢、あ、く、お、く、よ、せ、乃、是、は、幸、隆、と、い、ふ、是、輕、乃、手、懸、七、十  
餘、人、を、引、具、し、岩、尾、乃、城、を、出、子、曲、川、子、我、く、赤、岩、櫻、井  
加、澤、乃、邊、不、か、く、也、居、け、か、を、ハ、夢、み、も、あ、く、只、一、扨、外  
ル、を、蒸、さん、と、攻、具、を、由、支、度、せ、以、備、々、の、子、配、外、由、及、之  
く、我、一、番、乃、城、乃、乘、入、ん、と、を、見、引、く、馳、た、り、乃、敦、虎、昌  
以、由、を、切、居、なり、く、敵、を、圍、ま、し、ん、乃、勇、累、の、是、を、か、不、似  
て、晴、信、朝、長、乃、聽、せ、玉、人、知、也、後、め、た、し、以、片、や、打、者、追、拂

とんとく精兵八百餘人を去くが、越後勢乃八千餘  
人潮乃涌かこく千丈乃旗乃決たふやうに押寄る中  
面中ふらに、關乃敵をあけをめぐりて、切つて、越  
越後勢乃大軍おとす。路廣うねへ入替るへき便を  
得以先子乃戦を見くたぐふ。河をめぐりて、あせよくと  
擬勢をわきまへく。あせ居る。越後乃わくお思由より、  
鉄砲六七十挺うち立し。烟乃下より猛火のえ出く。焰々  
と燒上けは、景虎をのこし見返す。まじりて、真田子方便  
をたり。然ハ又敵を引揚よと云まじりて、例乃善竹の杖  
を打ふ。是く乘込らせし。かば、八子餘人、津、矢澤乃奥を  
まじりて、引入る。虎昌も、越後咬めんと、關東道二里餘追掛

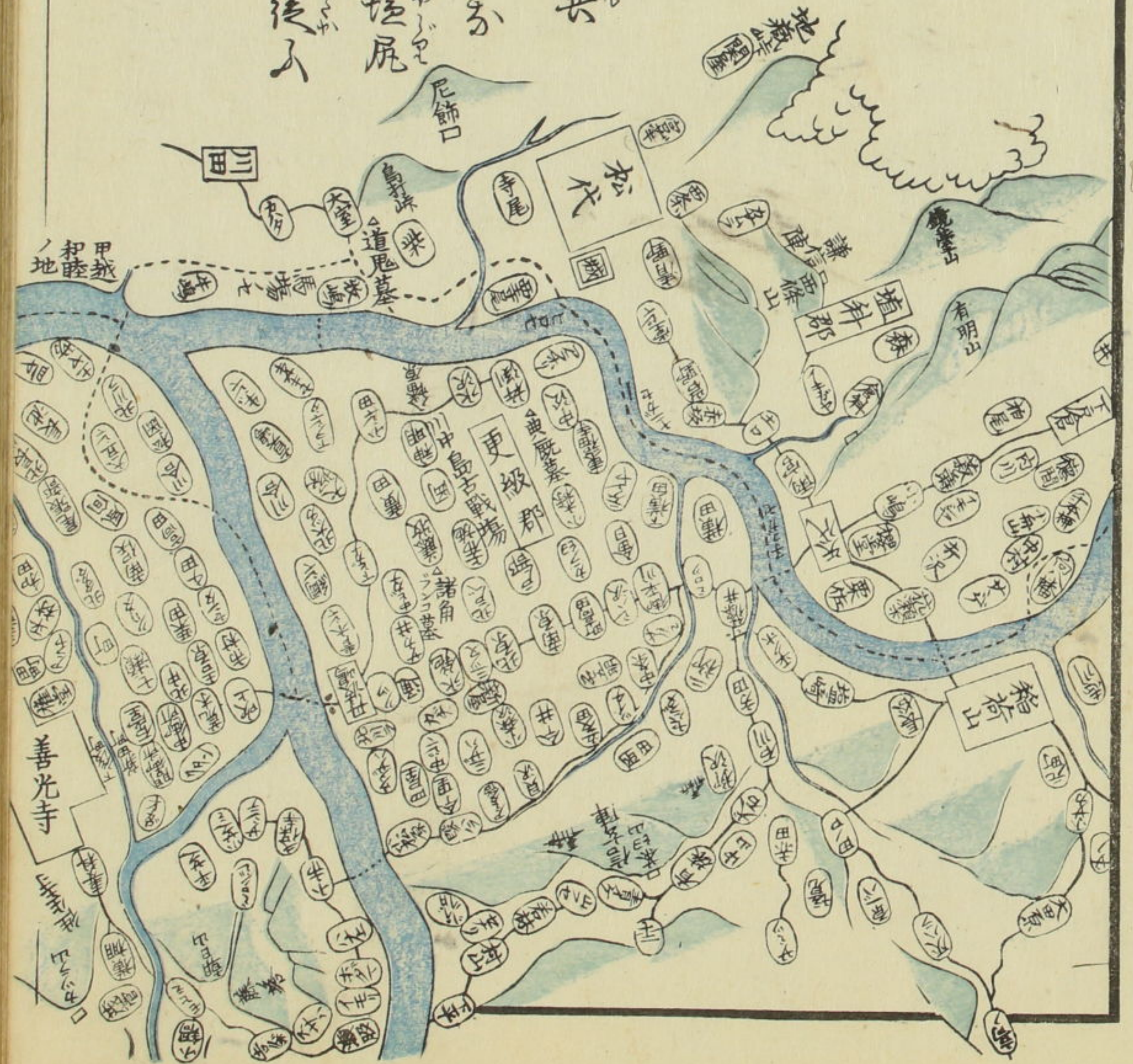
けふを項五、下乃勢、かくるらんと敵、味方、感歎  
せし。出乃後、晴信朝長出陣、あまとの龜と、軍を挑む。  
孫乃景虎、合戦を始し、對陣あり。數日を過し、むら  
越後へ引入る。是景虎、真田、不計策、おかき。十九年、  
景虎、あまの、内山、岩尾へおしよせ。虎昌、幸隆、ふたりの  
うち、是非、一人を打取く。先度の遺恨を、とらさんと、既、  
信利へ打入。先子、長坂、あまの、よせ、まじり、幸隆、あせを、  
晴信朝長、木曾、小笠原と、軍せん。と、拮据、あせ、陣取  
り、まじり、形、あまの、川中島へ、直、あまの、  
か、あせ、あまの、路、繪圖を、あまの、越後勢、  
たくを、あまの、晴信朝長、あまの、木曾、小笠

信列川中島方位圖



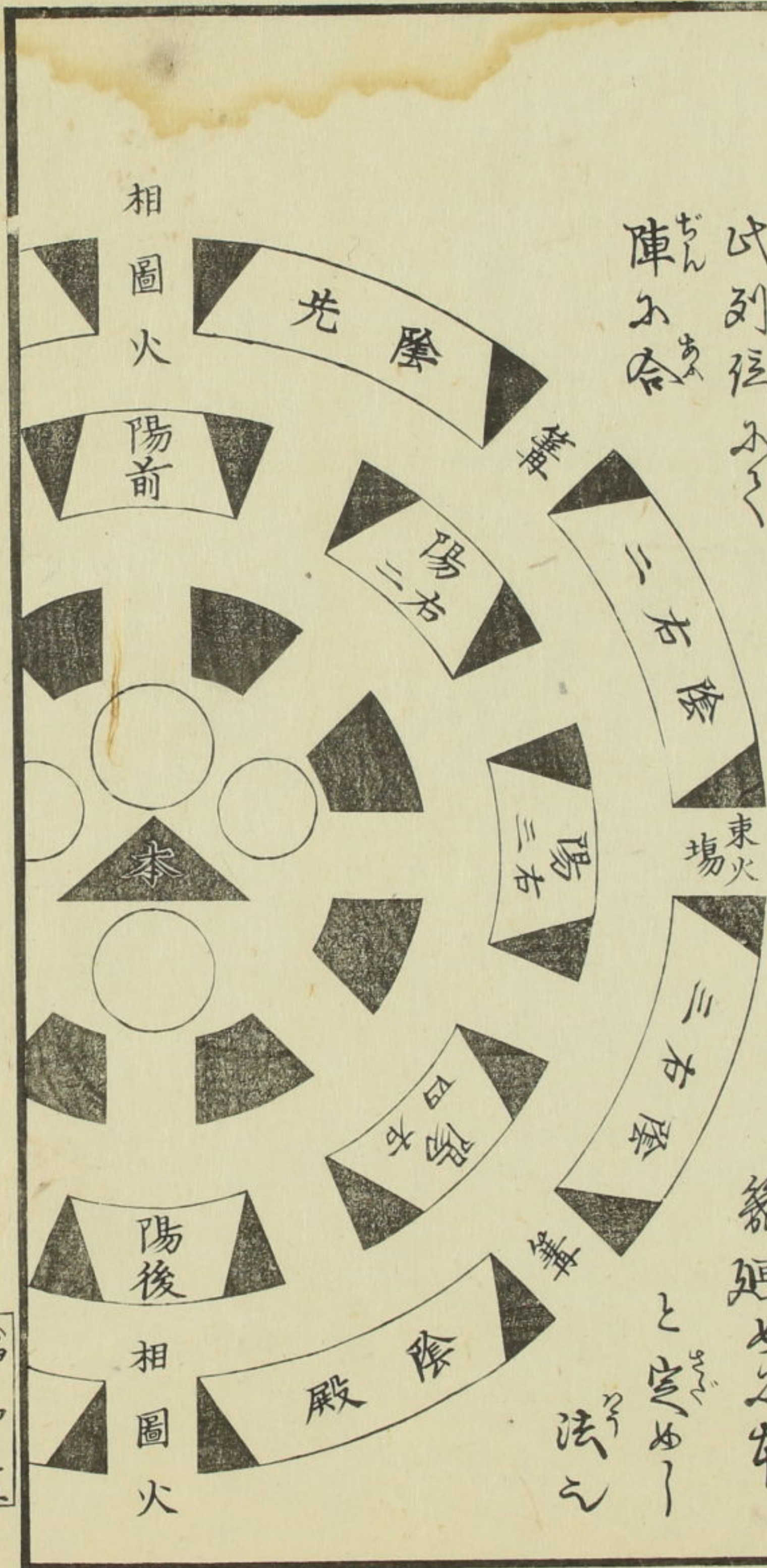
四、四十一

川中島古戦  
乃圖多一と云共  
方位差謬をくか  
か今上田塩尻  
原昌言の圖の後入



團陣圖 又龍丸備と云

團陣を陣取むかまらうあらは行軍子ゆまへ  
 此列伝みく  
 陣お合



後廻めふ本  
 と定め  
 法

五四ノ四ノ十二

龍の團陣の圖

諸家乃傳みふ處ニ定せ以今數本を集く校定一  
 此圖を以て極め儲瑜を志ふと云とハ陰陽  
 前後先殿左右奇偶を以て相合の理をきて他  
 未求むべきみあはぬ故に團陣の法みおのこ  
 ずく大外差とあはべりて然とハ於後の識者  
 乃是正をよめ



原ハ景虎ハ對揚さへし勢おし景虎をぐお追落したら  
んふハ西家ハ坐あぐら打亡し川魚ハ然ハ川中島へ向  
へやとて持梗ハ原より真一文字ヲ總社淺間外ハ  
深志乃城を押し會田幸柳の嶮路をいそ以猿馬場乃  
峠子寺より大旗小旗並乃敷たて晴信朝臣乃本陣と  
以景虎ハもく兄ハ佐久郡へ打入るべき支度ありしか共  
さらば川中島へ向ふ軍をべしと備を立直し善光寺  
山の上の旗本を固めたり西陣の間又六里を隔る屏川  
千曲川東西ハ流たは是れ幸隆ハ肺研よりおろ  
小縣佐久西郡の農吏二三年ふあひご軍役了勢けを  
を哀憐しくかくむ計も多かり四月十一日甲別方乃先  
あされ

鋒飯富兵部少輔虎島小山田備中守を左攻めたり棄  
原乃宿より段々備を押し其の次ハ真田彈正忠景  
隆佐久先乃諸士をお備とあし打續たり景虎ハ屏  
川をより丹波島ハ陣をさ但一万人を二ふふ分ニ  
陣々旗本と組合せたり志あり了真田越後勢乃餘りハ  
剛強ハ進め志ハ一戦ハ勝負を決せんと計ハ景色を  
見ず肝を寒しとれんと究竟乃足輕二十人計を引  
かく一村志げ色る森乃中へ隠せたりと見るとや一巖  
乃雷電をくめきて蒼天ハお揺曇見白日乃影消て  
真内ハお黒雲景虎乃本陣へ靡きつりかたあち  
一團乃焰火燃ひりおとて散亂是史將をく先諸軍勢









廿二を得る。官音の八十一より歸ハ六十九有奇と云  
る。比内縮分七を引て六十二を命期と以。出也。天正二  
年幸隆六十二歳。みく幸長。定數。ちる。王を誅へし  
桃首座周易明鑑を用く。比卦ハ項羽。まさう。援下。不。會。せ  
んと。生。教。とき。比卦を得く。ま。さ。う。士。卒。潰。散。せし。と。云  
里。險。難。を。お。悪。事。消。散。を。至。し。以。幸。隆。軍。復。せし。本。地。不。歸  
所。領。を。安。堵。し。り。お。て。比。判。断。より。合。し。去。る。由。幸。隆。今  
年。三。十。以。入。間。一。生。ま。く。お。半。を。過。た。る。當。來。の。福。分。を。祈  
らん。了。ハ。薙。髮。し。く。身。體。を。缺。り。く。天道。子。應。以。應。し。と  
く。天。文。廿。年。二。月。十。二。日。申。刻。晴。信。朝。長。と。共。ふ。鬚。髮。を。剃  
除。し。く。一。德。齋。入。道。と。云。廿。九  
歳。云

(五ノ四ノ七)

晴信朝長今年三十一歳。原美濃守虎胤入道清巖ハ又  
十四歳。小幡山城守虎盛入道日意ハ又十七歳。山本勘  
助入道道鬼ハ又十九歳。長坂左衛門尉入道釣閑三十二  
歳。と。か。同。志。く。剃。髮。せし。形。也。  
是。歳。一。德。齋。の。長。男。源。太。左。衛。門。尉。信。綱。十。六。歳。次。男。兵。部  
昌。輝。十。三。歳。三。男。源。三。郎。昌。幸。六。歳。四。男。源。三。郎。信。昌。六。歳。  
な。り。然。お。一。德。齋。甲。府。乃。執。事。ふ。中。け。お。る。其。を。か。ら。以。  
屋。形。乃。庵。の。蔭。ふ。た。ち。く。本。領。不。立。還。お。を。得。た。り。比。思。  
海。岳。よ。り。中。高。く。深。く。其。方。一。を。由。報。せ。お。る。今。切。不  
姿。お。の。か。り。成。り。以。へ。ハ。甲。を。環。し。戦。を。握。り。上。り。由。氣。お  
く。以。願。く。ハ。其。一。分。の。軍。賦。不。於。く。は。信。綱。子。讓。里。中。夜。以



幸隆剃髮

然ハ心乃任リ近國を巡行シカマ川を以テ軍配乃案内  
を檢察シ御出陣乃方便ニカキ以テヤと存ヒト  
頻ニ愁訴セシカモ遂ニ一德齋の中乃あり岩尾乃城  
ト小縣乃本領を信綱ニ讓補あり是乃一德齋の  
深キ慮トモ後ハ人々出リ以テ世々けり後ハ關東  
管領上杉部太輔憲政ハ北條氏康ニ戰マケテ越後國  
ハ立越長尾景虎を養子ト取リ關東管領を讓ラセテ  
ハ景虎亦々養父乃ためニ此條を滅シ關東を并吞シ  
八列ノ跋扈セシト游龍乃雲を起シ騰蛇の霧を撥ク思  
をカキ去リ是乃村上を援リ信綱を争ハ軍畧乃外ハ又  
一川乃孽根を醸シケリ一德齋出乃虛ニ乘テ奇計

を施さんと云ハ深志乃小笠原へ越後より使者を作  
里夫々遣リけ也ハ長時よりあんな速く返書を認  
めク是を使者小渡ハ景虎小縣へ打カ玉入出汝長時誠  
訪ヘテくらさ中ベリ兩旗亦々合戦を挑ミ以テ必定  
甲列亦々切ハ年亥の本意を遂ンテ掌の内ハ以カド  
書大系目付を總ク前後リ且長時より初ク贈カ状子書  
カシク越後へ遣シ景虎亦々小笠原乃來書を喜ク其  
約束の日時を違ヘ以出陣セバ由を返答シ一德齋出  
乃状を得ク佐久小縣兩級乃諸士ハ軍法を商儀シ直ニ  
甲府へ事状を注進シテ去リ是乃配尋常ハ  
施レク是斯トハ去リ景虎天文廿一年三月二日春日

山を打三おかき八日乃未明ふ小縣郡常因乃生家ふ  
放火しく亂妨か一。小笠原へ力を副んと相圖の烟を三  
り走どゆ長時せざる甲別勢ふ攻付ら色持城二三処守  
落さる居城深志了引籠り大息のいへ居たりしかば復  
景虎の約束遅延せしを恨かこち復子を合せんとゆ為  
ざり々甲別方ふ六日の夜刻子勢様ありく我の口  
直ふ發足し八日乃子刻ふ先陣を常因乃東十又六町  
むかひふおし付く景虎出りくびも信別方乃手筈相  
違せしをせとせか甲別勢の排連子出張せしを怪  
と忽ふ人数を引上地無味をせ越く頃坂まき退たり  
と一徳齋あ色を見く長尾政景が三子餘人を一手ふ

か一殿し地蔵峠を馳去さんとせふ外へ政以けたく  
一柄子柄おとせんと味方を勇めく責上る政景を兵  
か也は火逆ふとせく返し坂を下りふ切崩せば小山回  
左兵衛栗原左衛門洗手痛く軍く重手あま負志村  
金助以下大剛乃勇士數輩うち死を是等々甲別方ふ  
よき者か也は我乃子より崩せゆり夕我を真田横合  
よ星壇とせり返し息をゆりせ以撃よ也は政景遂に  
戦まけ味を上りふ敗北し幸き命を助かり衛越後へ引  
還し景虎乃棄去く救を合ふを問えとめく互ふ遺  
恨を醸け合種とせか見ふなり是真田が反問子出り水  
みく終ふ兩國勝敗乃根蒂とせか英雄乃心機まて不怖

過し、尔後一德齋甲府へお仕し、越後ふく地藏味乃合我  
を怪儀し、景虎乃婿婿政景を棄殺さんと為大ふく近頃  
殘息乃武累なりとく、將士景虎を恨むお仕、たゞく小間  
出し、くひへむ、今年年の不ど、信列へ打出、お仕、有ましく  
以、天晴我乃間、深志を所計策、以へと中勸、大ましく、お仕、  
實志の教へし、く同廿二年、六月十日、深志へ取、お仕、  
小笠原長時を追出、日向大和守を入、直筑摩安曇の  
二郡を沙汰し、府ら教、真田が計畧、乃神妙なるを、今、お仕、  
ぬを、お仕、く、農中の物を、さく、く、籠底、乃財を、捨、お仕、  
感せぬ、を、乃、お仕、お仕、お仕、一德齋、お仕、お仕、  
村上を、走、し、く、西級を取、お仕、く、小笠原を、追、く、二郡の地を

并せ、披群の功を、立、教と云、と、お仕、お仕、  
お仕、を、憤、且、景虎が、良、お仕、お仕、お仕、  
領を、復、さんと、謀、お仕、を、我、腹、心、乃、疾、と、お仕、  
謀、を、入、買、火、小、事、お仕、より、お仕、  
洛、一、室、町、御、所、へ、出、仕、し、將、軍、義、輝、家、乃、御、一、字、を、中、く、  
虎、と、改、め、關、東、管、領、小、補、せ、ら、お仕、  
下、向、を、教、由、を、進、進、せ、し、お仕、  
信、綱、を、近、決、け、し、語、教、や、う、實、お仕、  
御、心、乃、任、お仕、から、將、軍、家、お仕、  
名、字、の、近、く、お仕、上、お仕、  
氏、重、代、乃、家、又、大、お仕、

然と由武田小笠原なんど乃家々と對揚をへきとかせ  
甲府へ系向せし時出乃旨を披覽せば敏慧入道殿信玄  
星かき梅く景虎と對面あらん時乃心計と由あふべ  
よく心せよと教訓あくとけ教  
軍防令を檢ふ兵士衛士各國乃正丁より出身志く  
勲位を得不裸乃戸編以ると云共元正丁一かあ也  
の軍團をせお新く正能を以たし愈は武藏掾良文乃  
長子忠通叔父良房乃子とく相摸國小後里二男忠  
頼武藏子任し父が遺跡を續良文乃野與村山二黨の  
祖大里忠通乃三浦鎌倉二黨乃祖大里良文武藏掾小  
後里忠通忠頼と由小兵士乃藉ふ登ふと云と由父乃

蔭かく身乃勲を得せは無位乃正丁なり忠通の子  
為通を平大丈と云軍功勲六等小至也はあふ屋く六  
等ハ從又位下子准と教を以て大丈と稱せ教乃之勲  
授乃又位あり少也は淺緋乃朝服を衣之を得以但  
黄袍を服せ愈く為通の弟景村鎌倉小任也又兵士乃  
藉ふ貫せ教乃之無位乃正丁たふと見と同く景村  
乃子景明其の子景弘も亦同く鎌倉乃兵士あり祖  
綱の負賤を輸せと令乃定形り景弘ハ長尾乃祖小  
く石橋山小真田與一を討てふ長尾新六定景乃及  
定景より景虎小至ふまう十餘世乃際衛府乃官を極  
と教あり國司乃辨を冒せありと云と由皆戰國の僭



称ふく朝家乃授記を申せしふあり次たへは庶  
 島寶藏不傳也不岩城義隆乃状大掾其乃状の如し

松永守

文領事



三月廿日

料紙

引合の

如し

堅又寸

横一尺

又寸

余

松永守

友途任

如也



五月十日

料紙

松永

如

三又寸

横一尺

余

四ノ四ノ廿三

清泉五郎義隆

清泉五郎左衛門尉と称せしを

清泉五郎

岩城義隆乃許し清泉和泉守と称せしを但義隆の  
 始由隆と云乃ち不義隆とありたむ岩城二郎大史則  
 道十六代乃裔ふく民部少輔と云義隆乃曾孫常隆乃  
 養子貞隆の長子也又義隆と云史は後子佐行の嗣  
 とあり少将修理大夫と申せしを受領と云ハ百姓を  
 字養し農桑を勸課し一方乃重亨子當且庸才の死を  
 企つべき所子ありてかハ天平寶字二年十月甲子

日勅し、項年國司交替之於口年を以て限と以斯則  
民を勞まふ不足のそ未以て化をべり、以自今以後  
六年を以て限と為よと云然ハ今年某國乃守ふ任  
そ乃國子下向一國府子任一國政を執り、正税を運  
上し介掾日史生と公解を配分し、時を以て國中を巡  
行以但馬國天平九年の税帳、國司巡行所部一十一  
度とあり、また春秋二度出舉官稻巡行と云とあり、是  
ハ日史生醫師ふく巡行以て觀風俗からひ了同百  
姓消息巡行と云とあり、催而姓産業巡行と云とあり  
責計帳手實巡行と云とあり、檢校田租巡行と云とあり  
為穀類稻巡行と云とあり、檢校庸租巡行と云とあり

五十四四廿四

收納當年官稻巡行と云とあり、守日史生、中巡行を各  
お里守乃巡行、小將後三人、日小將後二人、史生、小將後  
一人、ま、毎く上下九人、なり、去乃巡行、日別、小守日史  
生、小稻田把を充ら、秋今量、あ、一升九合、部、句、許、小  
あ、秋將後、了、ハ、稻田把を充ら、秋今量、の、一升、口、合、口  
白、なり、此外、小守と、目、子、ハ、酒、一升、今、の、九、合、口、鹽、二、勺、を、充  
ら、史、史、生、小、酒、八、合、今、の、七、合、口、鹽、二、勺、を、充、將、後、小、ハ  
鹽、一、勺、ハ、撮、を、給、を、守、乃、將、後、三、人、と、あ、ふ、を、以、て、其、行  
壯、中、お、し、ま、か、あ、べ、一、國、中、の、成、敗、を、司、あ、り、故、了、國、司  
と、云、上、小、受、く、領、を、あ、を、以、て、受、領、と、云、大、國、乃、守、ハ、從  
五位上、相當、なり、上、國、の、當、り、從、文、位、下、相當、なり、文、位

上古國司巡部圖



鳥羽僧正筆と云

傘持  
白丁

馬副

白丁

玉四ノ四ノ世文



國司

衣冠

帶劍

良獲中

八折ハ一

兵士

衣ハ柳深袴

玉四ノ四ノ世文

以上は勅授位記を給し、中國の守正六位下相  
なり。六位を奏授位記を給し、勅授の中務省より奏進  
出く天子の可を受く位に叙せ給を云、今人皇の直子  
命せられ給くと比せべし。奏授ハ太政官奏し、位に叙  
せ給を云、今執政の人皇の命を傳えられ給くと比  
せべし。下國守の從六位下相なり。中々奏授なり。是  
國司叙任任官の式なり。位記の書式等ハ然ハ長尾家  
代々強勢并兼自占の田宅ハ富有なり。乃ハ無位の女  
士た外ハ勿論なり。武田家の如きはあはれり異なり。太  
祖刑部正義光朝長史なり。清和院乃天皇七代の  
皇胤ハあり。父ハ正仁位下賴義十二國の受領を歴

く鎮守府將軍たり。祖父ハ從六位上賴信。十國の良宰  
としく、鎮守府將軍左馬寮の頭たり。曾祖父ハ正仁位下  
滿仲。十國乃重尊を歴任し、鎮守府將軍、東宮亮、左馬寮  
の頭たり。高祖ハ桓基孫王の皇親より源氏となり。正  
四位乃上階り昇り、六國乃任を勅し、鎮守府將軍、大  
宰大臣となり。累世昇叙し、雲上乃藉不列以、義光朝  
臣、文位の榮爵ハあり。之ハ久しく秋官の郎中たり。然り  
云より、以降晴信朝長より至るまで、十九代、柳堂親屬の  
貴族不列し、官位とゆる等倫ハ超過せり。あはれ門地を  
もつて比肩せべし。所ハ所以なり。一徳齋、まの一解  
乃景虎を激せ給不更り。中々晴信朝長より、勝不乘

志むるを察知し信綱を以て是を云々せしむ  
けぐ永祿元年又月十日川中島乃和議を成し  
張本と云べく必竟甲斐乃合戦一徳齋乃父の仇を復  
す多年の鬱懐をそそり見べしたと庵皮留  
侯張良乃漢乃高祖を佐く秦を殪けり如く固韓の爲  
小宛を報ふを意と以秦亡びく良の意足り救ふ諸  
侯の爵を榮とせし赤松乃遊を甘ひ一徳齋をくみ女  
の仇乃容易出ひあくる宿志乃遂かたきを思ひ又別  
一策を講以下回子分解を察し  
斯く甲斐乃兵勢を考ふ於不持重みく敵乃變を伺ふ  
この甲軍數年の際練熟せし處を以て更なるけ

五十四四七七

かす剽逸あく敵不對以鼓譟あく變化せし先んとせし  
ゆ乃兵越兵每度乃機轉をもとめし信列の諸士か絲  
存知乃上か也は此後とく其意を以て對陣し以て  
短慮の輝虎入道を怒り味方十分の勝地を居んと疑  
ひ形を好り我身ゆきくみ及へば止是乃分を守  
る累世乃率領を平治し子孫乃繁榮をた乃くむる  
て尔後を越後の消息を海津の高坂外託し自身を窺ふ  
しゆせし一向ふ小縣乃郡民を教育し七子六百餘貫  
乃軍賤を鍛練年月日のたれしを以て忘らせしと好り  
信元嘗て真田一徳齋乃治兵を聞其法士大將一  
知約二百貫番頭一人百貫足輕百人但一人二貫

あまの長柄鐘かひぎと十人小旗馬外も廿人  
道具巾巾人乃神弓足輕廿人を一組と  
ハ三貫ひく足輕大將又人武者等約一人旗奉約二人  
鐘奉約二人十貫ひく士十人廿貫ひく四十又十貫  
ひく總約千九百貫ひく一備六十二騎足輕二百人  
且然し是を又十騎乃隊と云真田二百騎と甲陽軍  
鑑不見ゆ也ハ千九百貫を口傳し七子六百貫と知  
也た是信列乃地恒ハ平均一貫口俵乃法子前不と云  
ハ七子六百貫ハ三万口俵不當不真田信列乃譜不  
小縣三万八子石余ハ本領とある也形不盈一三万  
四百俵を口傳し歸り七子六百表ハ九百貫約見二

貫ハ八表之貫ハ十二表十貫ハ六十表廿貫ハ八十  
表之十貫ハ百二十表百貫ハ四百表二百貫ハ八百表と  
志不廻し  
永祿四年八月上杉入道信列へ打書西條山を陣城と  
し海津城を眼下不見か一炬を打とさんと謀る  
由境目乃間諜より追々不注進せしかば一徳齋ト川中  
島へ向ふ山本道鬼が大正十備乃うち不組合せ西條山  
乃寄手不加し軍の郊刻と定め一勢を段々打立先  
陣をさふ山下へをい鯨波を修也ども山より兵一  
人ゆねく結白川中島ヲ合戦ありとをわしく鉄砲の音  
厳しく黒烟天を焦し見えけせばあむは惜し上杉不

出拔也大軍の志りくは軍の様も心元形も續や入々と  
云まゝ了。諸將を合せ高坂陣正昌信より先小進く雨  
宮乃渡をせ越直江に城守が小荷駄を切くせは越  
後の後備志より成る敗軍せ直江備を立かをさん  
と立上り下知を教如へ一徳齋をさく先甘利小山田  
以下一萬二子餘人火波を打せく突をせハ越後勢遂に  
途方を失ひ散るる亂也敗北以かくて甲列方あく  
典厩信繁を首とく諸角山本初鹿野をんと云良将勇  
士をかく討死せしかと火将甚展をさぬ也以勝陣を  
と足行ひあひぬ一徳齋出乃合戦を能く思惟する  
小越将西条山より上り要害に保まふと十國をさす教あ

五十四ノ四ノ廿九

既小遠くよく後陣日を過を極らんや然も山嶮く谷  
ふり大軍の久く據守へき地もあらず甲列  
乃將帥をかよく知とあぬ形なり時火將海津小入る壁  
を堅く容易出れぬとぬく退兵を出し越後の路を絶  
奇兵を發し西條山下小柵を付しめば坐あかす敵を  
擒小まへき小わくふ危き合戦をかから目見ぬ  
乃之般ら以山本道鬼を付せしとあてぬくぬく也我身  
甲列方小加たすく父祖累代の本領を安堵せし根を尋  
せば以入道乃推舉よふか我より是より乃ち誰と共小  
謀里志也と共小謀家也鍾子期死志く伯牙琴絃を以  
と云とあり我も小蘿髪くく虎形小似く甲冑を被

弓箭を握金鼓の節不應とて死生を争ふへきにあらず  
 と心中に思定しかば高坂小田等乃決將と膝を組甲  
 將幕下子列座を分て今日を限日と見おし何より猶  
 打とけし軍乃決儀をかし笑まけし退きし日の直子  
 筑摩川を打りて是保科乃宿不里觀音堂小一夜明し  
 ありよ里郎從共不引別也口阿乃乃乃拳日けし上野國  
 吾妻郡羽尾乃里不引籠里山賊等を友と扱し深ふ乃春  
 乃邊橋軒ふかけひ乃谷乃水あはれ乃垢を洗ふへき便  
 とお敷を樂まき三年に年をまぐり何時刷しとハ  
 去ら孫ども吾妻乃士不富澤唐澤割田浦野蜂巢などを  
 せしめ岩下小口交際小林大戸横谷湯本藤原西窪乃一



